T 大学に受かった E 君の話

学習塾で私達が直接教えていた時代の話である。私達は、中学校時代に国語の力を身に付ければ、高校では絶対に学力は伸びるとの信念から、中学校の国語の授業を重視し、力を入れていた。

中学校の時国語が苦手だった私は、高校 1 年の 12 月、ドクターストップで部活をやめさせられて時間が余った私は、国語の T 先生に頼んで、当時高校ではめずらしい国語のゼミをやって頂いた。一人ではやりづらいから友達を 2，3 人誘って来いと言われ、友達 2 人を誘いゼミが始まった。

最初のゼミは今でも覚えている。テキストは、能の指南書「風姿花伝」だった。その文庫本を買って読んで来いと言われ、1 週間後にゼミが始まった。いきなりその内容について質問された。難解な能の指南書である。私は「分かるはずがない」と言ってしまった。いきなり怒られた。「君が国語の力を付けたいと言うから、このゼミを引き受けた。なのに、いきなり『分かるはずがない』だと。だから、君は国語ができないんだ。君は文章の読み取りの仕方を分かっていない。著者は言いたいことが変われば、段落を変える。だから、その段落には必ず 1 文、著者が言いたい文がある。それを見つけて繋いだのが、その著者の論旨だ。その論旨から設問に答えれば、必ず正解が得られる。そこで、その著者の言いたい文を探すために段落をどう読み込むかだ。実は段落の表現の仕方は、3 種類しかない。・・・」と。あの東進の林修先生が言われる読解の仕方と表現こそ少し違ったが、全く同じことを教えられた。次回、再度同じテキストで、その内容について議論をさせられた。その後数カ月、様々な文庫本をテキストに、読解力、判断力、表現力の訓練をさせられた。お陰様で、私の国語の定期試験や当時の公開模試の得点が取れるようになり、浪人はしたが、国立大学人文学部合格に繋がった。

そんなことがあり、私達は当時運営する学習塾では、月 1 回の作文指導も含め、T 先生に教わった国語の読解力、判断力、表現力の訓練をする授業を行っていた。勿論、国語の読解力の基本は文の読み取り、即ち、単文・複文・重文の文型を踏まえた上で、主語・述語の把握に始まり、文節の修飾・被修飾関係の把握することによって文を読み取ることである。そして、前述の段落の読み取りから、著者の論旨を読み取る。論旨から答えを導く判断力、答えを記述する表現力を鍛える授業である。

E 君はそうした授業で国語の学力を伸ばし、結果他の 4 教科の学力も伸び、地域で一番の進学高校に入学した。勿論、高校も引き続き当塾で勉強してくれた。

ところが、その E 君が高校 2 年の 2 学期が始まったある日の朝 9 時頃、母親と共に当塾に来校した。聴くに、日本で一番の難関双頭大学・T 大学に行きたいから、高校を中退して受験勉強に打ち込みたい、と言う。驚いた。毎日朝から塾で勉強させて下さい、とのことだった。でも引き続き、夜の塾の授業にも参加する、と言ってくれた。

色々と話し合った結果、彼の性格も活かし、毎日朝 9 時から 16 時頃まで、当塾で高校の教科書や紹介した参考書などで勉強し、16 時頃から 1 時間ほど私や担当講師が質問指導することになった。T 大志望とは言え、私達も塾の業務や夜の授業準備、はたまた NPO 事業の対応もあり、朝から彼につきっきりで指導はできない。いや、塾屋がこういうのもおかしいが、受動的な授業はあくまでもインプットの一手段である。能動的な自立学習が学力を伸ばす一番の方法である。それ故、朝から 16 時頃までの勉強は、私自身が自宅浪人の勉強で編み出した学習方法、即ち、「古文研究法」「わかる物理」などの参考書の名著と、「受験の英語」「受験の数学」（共に当時）の月刊誌を活用した、大学受験 5 教科の自立学習方法を伝えた。他の担当講師たちも自分たちの経験を話してくれた。そしてそれらを参考に、自分自身で自分に合った勉強の仕方を決めさせ、実行した。

まずは 2 か月余の 11 月上旬の、当時の大学検定試験残り 3 科目に合格し、大学入学試験受験資格を得た。勿論、可能な限り各種の模試を受け、その都度私達は彼の成績を分析し彼と話し合い、その後の学習内容を決め、受験勉強を支援した。そして彼は、高校を中途退学して 1 年半、こうした勉強を見事にやりきった。

結果、見事に念願の T 大学文科 2 類に合格した。